

証拠獲得・証拠評価の留意点

～ハラスメント事例を念頭に～

弁護士 堀江 将生

本日のポイント



- ① 事実認定の基本的な視点は何か。
- ② 客観的な証拠をどのように獲得するか。
- ③ 獲得した客観的な証拠をどのように評価すべきか。
- ④ 供述証拠の獲得はどのようにすべきか。

① 事実認定の基本的な視点

Q 「事実」は、何で成り立っているか？

- ① 「人」 = 登場人物
- ② 「時間（の流れ）」 = 時系列
- ③ 「場所」 = 場面

① 事実認定の基本的な視点

Q なぜ、「人」「時間の流れ」「場所」が大切か？

→ 調査の方向性を検討するに当たり重要な要素であるから。

① 「人」について

→ 誰から話を聞くべきかが分かる。

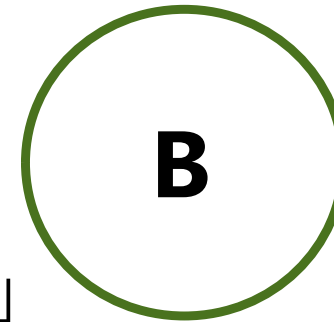
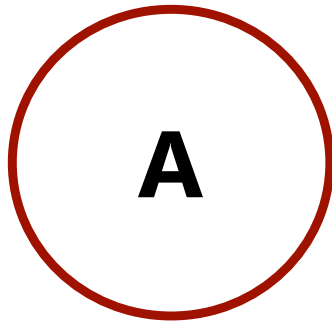
② 「時間（の流れ）」について

→ 一過性の出来事か否か。供述の信用にもかかわる。

③ 「場所」について

→ 防犯カメラ映像等の客観的証拠の有無。目撃者の有無。

想定事例



「そんなことも分からないのか。」
「辞めてしまえ。」

- ・ 管理部長
- ・ 男性（48歳）
- ・ 入社25年目

- ・ 管理部・主任
- ・ 男性（28歳）
- ・ 入社5年目

② 客観証拠の獲得の在り方



Q ハラスメント事案でどのような客観証拠が考えられるか？

- ① 録音データ？
- ② メモ？
- ③ 日記？
- ④ 事前事後のLINE等でのやりとり？

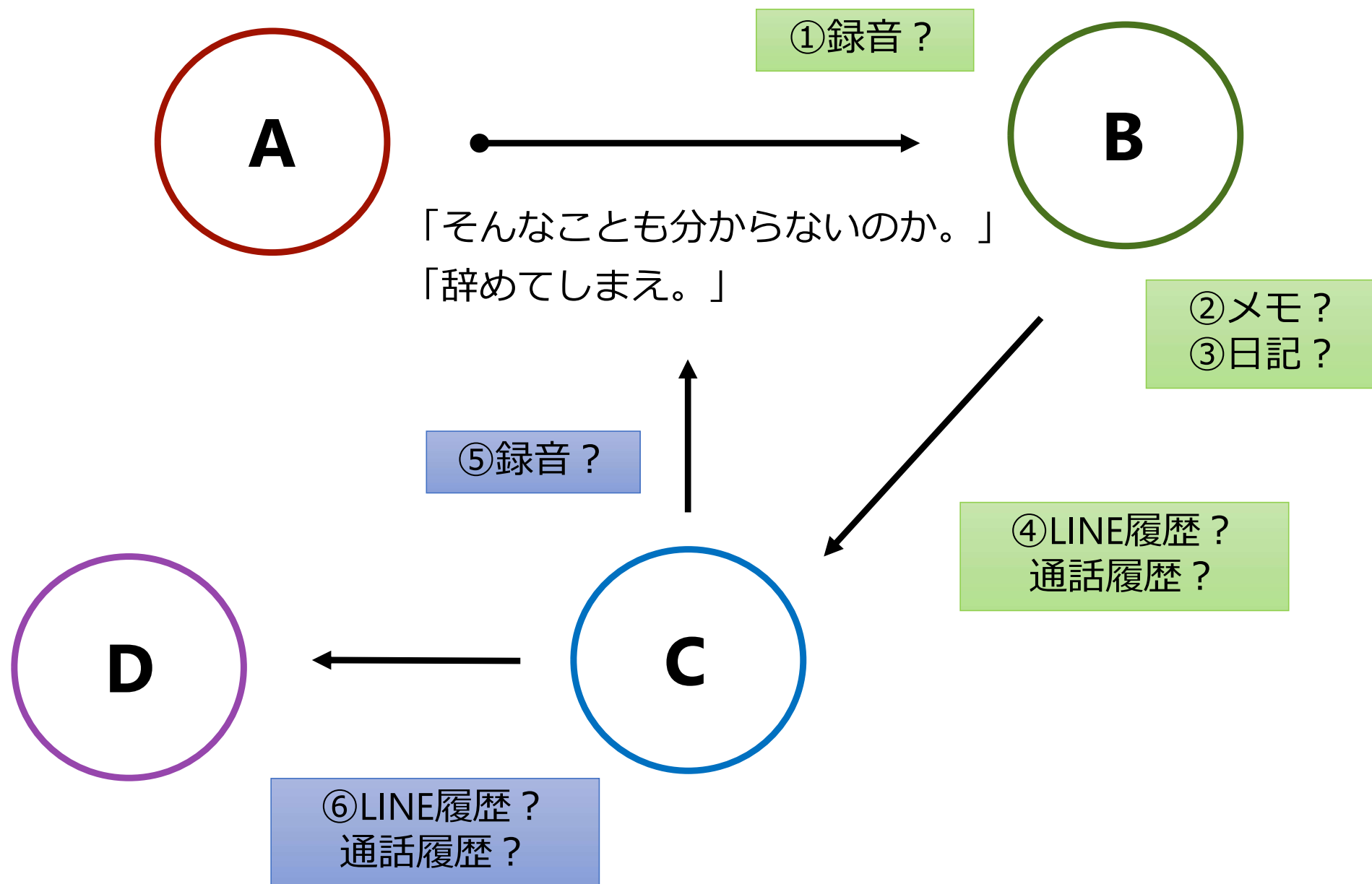
※「メモや日記は証拠にならない。」と考えている通報者がいる。

→ 単に客観的な証拠はありますかと尋ねるだけでは不十分

※事前事後のやりとりに関する証拠は不要と考えている通報者がいる。

→ 供述の信用性判断に関わるため、幅広く確認する必要

想定事例



② 客観証拠の獲得の在り方



Q 通報者らとどのようにコミュニケーションを図るべきか？

- ・「今回のハラスメントについて、客観的な証拠はありますか？」

→ これだけでは不十分？

※ 通報者らによっては、様々な背景事情から客観証拠の提出に不安

→ 前提として、提供を受けた情報をどの範囲で活用するかを整理

→ 通報者らに安心感を与える説明

よくある質問例

- ・「これって、相手に知られるんですか。」

- ・「これって、会社のどの範囲の人に知られるんですか。」

- ・「不利益ってないですか。」

想定事例



担

「客観的な証拠はありますか？」

- ・ 録音したって相手にばれたくないな
- ・ 日記・メモは違うよな
- ・ 第三者を巻き込みたくないな

録音

A



日記・メモ

B

第三者との
やり取り

③ 客観証拠の評価の在り方

Q 録音データがあれば、事実認定は盤石か？

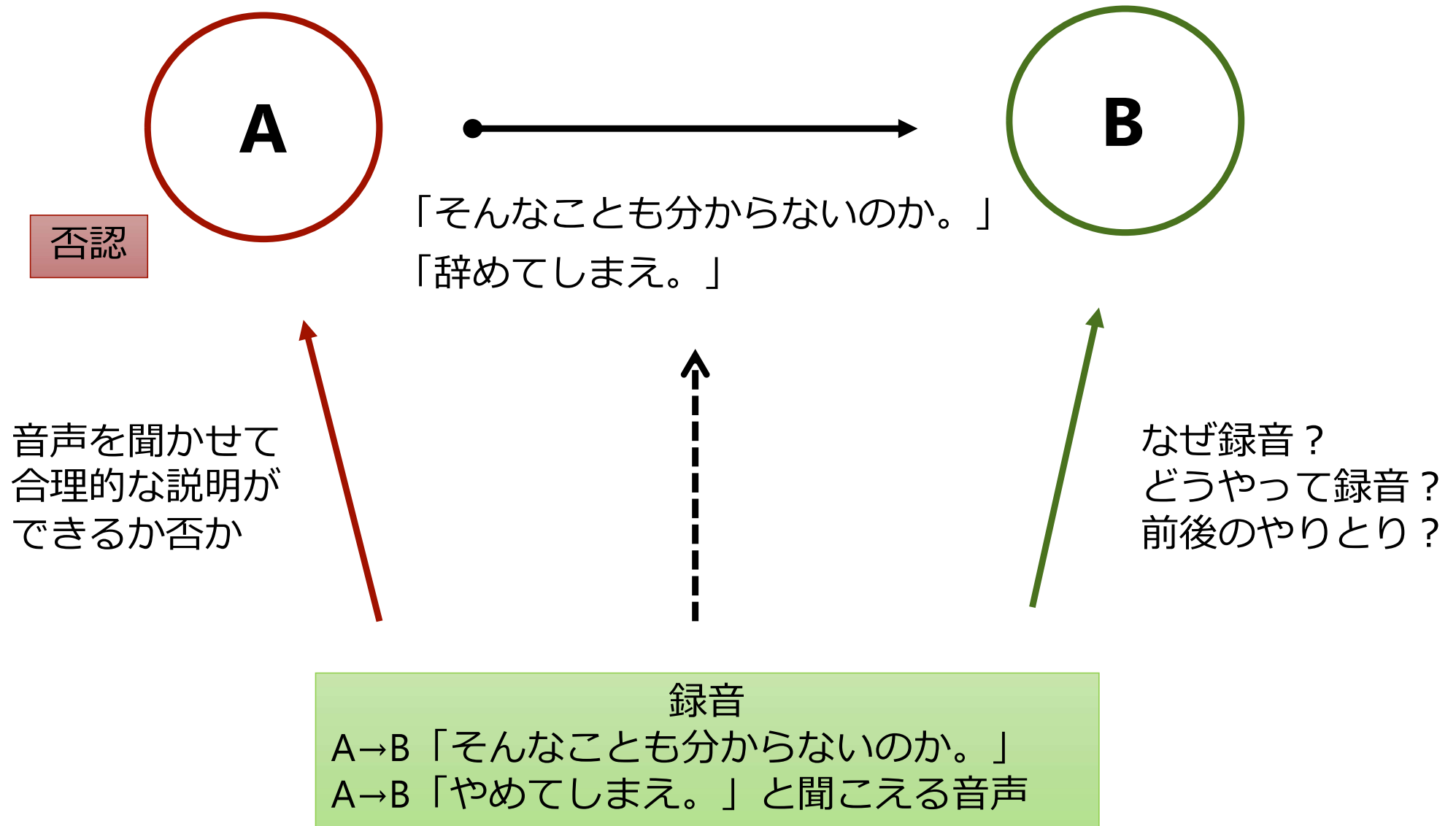
【問題意識】

- ① 録音された場面はどの場面か
- ② 音声鮮明か
- ③ 改変の可能性はないか

- 音声内容やプロパティ等により客観的にこれらが特定できない場合
→ 録音経緯、録音状況、不鮮明である理由等につき、録音した者から話を聞く必要。
- 録音には表れない事実（前後の状況、人間関係等）
→ 関係者の供述に頼らざるを得ない。

※録音データがある≠供述証拠の獲得をおろそかにしてはならない。

想定事例



③ 客観証拠の評価の在り方

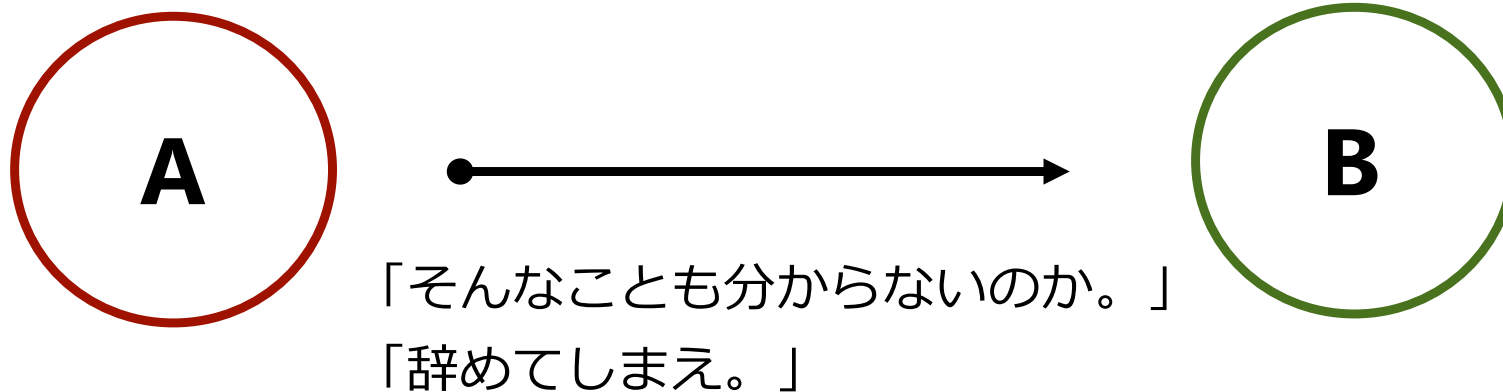


Q メモや日記の証拠価値をどう考えるべきか？

【ポイント】

- ① いつ作成したか
 - 記憶が鮮明なうちに作成したか否か
 - ② なぜ作成したか
 - 普段から作成しているものか否か
 - ③ どのようなものに記述したか
 - 特定の日付が記載された文書の裏紙など
 - ④ どのように記述したか
 - 同じ筆跡か、後で付け加えた痕跡がないかなど
- ※ メモや日記を付けた人の立場になって立体的に考える

想定事例



【ケース①】

A4白色コピー用紙にメモしたケース

【ケース②】

いつもは記録していない日記帳にメモしたケース

【ケース③】

出来事があった次の日のチラシにメモしたケース

→いつ書かれたものか、どのように書いたものか、何に書いたものかにも着目することが肝要。

④ 供述証拠の獲得の在り方



Q 被害者と行為者の供述しかない場合、事実認定できるか？

言った言わないになってしまう？

→ 被害者の供述が信用できると判断できるだけの材料が必要

→ 質問を工夫して、信用性の高い被害者の供述を獲得する必要

※ ただし、客観証拠がない分、事実認定が困難になることが予想

→ 通報者に対する合理的な事前説明の必要性

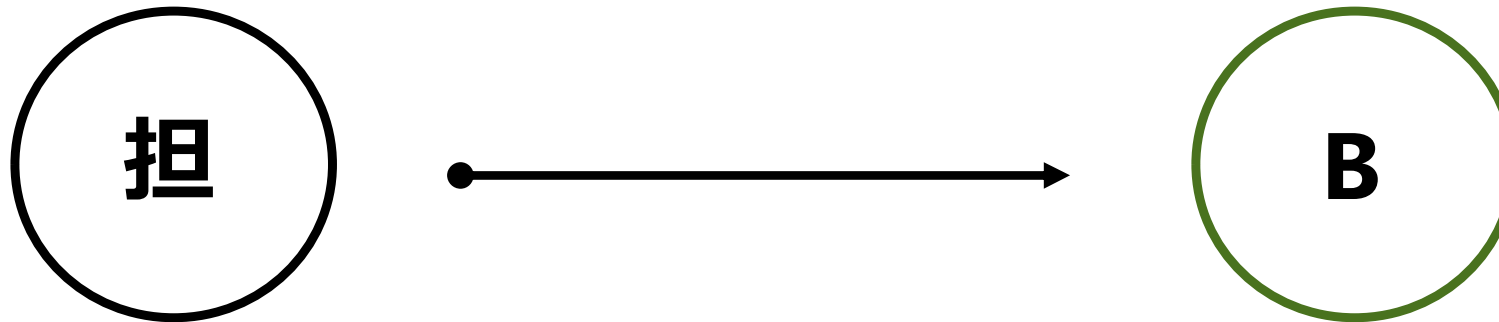
④ 供述証拠の獲得の在り方



Q どのようにして信用性のある供述を獲得するか？

- ① 質問の種類を理解し使いこなす・意識する
→ オープンクエスションとクローズドクエスション
- ② 時系列を意識して質問をする
→ 時間の経過の中で合理的な行動をとっているか否か
- ③ 分かった気にならない
→ 多分こういうことだろうではなくて、ちゃんと確認する

想定事例



【質問①】

「何があったか、最初から最後まで話してください。」

【質問②】

「○から●までの間の出来事を話してください。」

【質問③】

「Aさんから、何と言われたんですか。」

「その話は、いつのことですか。」

【質問④】

「Aさんから、●と言われたんですか。言われていないんですか。それともそれ以外ですか。」

→必ずしもOPに固執しないこと。意識して質問することが大事。

ご清聴いただき
誠にありがとうございました

お問い合わせ先

弁護士 堀江 将生

(第二東京弁護士会)

E-mail: masao.horie@aplaw.jp

渥美坂井法律事務所・外国法共同事業
〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-2
富国生命ビル（総合受付 16階）
Tel: 03 5501 2111（代表） Fax: 03 5501 2211



※ 本セミナーの内容は、一般的な情報提供を目的としており、個別案件についての法的助言ではありません。お問い合わせ等は、上記弁護士までご連絡くださいますようお願い申し上げます。